

月刊

生徒指導

Seito Shido

【特集 LINE UP】

2013.8

- キャリア教育の潮流
～生きる力と生き方教育～
- 子どもたちに身につけさせたい力とは
- 自立って何だろう、その支援は？
- 教師が見せる社会人(大人)の姿

学事出版
教育文化賞
受賞論文

協調学習と言語活動を通じた
道徳的実践力の育成

50th
創立50周年

特集 いまの子どもたちに必要な“キャリア教育”とは？

生きる力と生き方教育



8

いまの子どもたちに必要な「キャリア教育」とは？

生きる力と生き方教育

キャリア教育と聞いて、何を思い浮かべるでしょうか。

職場体験、インターンシップ、課題解決型学習……。

いろいろある中で、子どもたちにほんとうに教えたいこととは何なのでしようか。

8月号では、キャリア教育における「生き方」と「生きる力」について考えます。

座談会

「生き方を考える、生きる力を育む」

小坂 元
井口辰也
澁谷浩子
松浦貴昌



論文

- ①キャリア教育の潮流 松井大助
- ②子どもたちに身につけさせたい力とは 土田雄一
- ③自立って何だろう、その支援は？ 佐々木光郎
- ④教師が見せる社会人（大人）の姿 新井立夫

テーマ ● これからの社会をどのように生きていくか

生き方を考える、生きる力を育む



学校現場にキャリア教育は浸透したものの、その「キャリア教育」のとらえ方はいまだに人によって異なり、ともすれば軋轢を生んでいるようです。今回は、そのキャリア教育という言葉にはあまりとらわれず、これからの社会で子どもたちが元気に暮らせるように、大人として何を伝えたいか、どう力になりたいか、というテーマで、学校内外の人にそれぞれに思うことを語り合っていました。

取材／文松井大助

生徒の意欲や生活力が低下していないか

編集部…テーマは生き方や生きる力についてですが、はじめに、先生方はいまの学校のことを、ほかのお二人はご自身のお仕事のことをお話しただけですか？

小坂…都立高校で3学年の担任をしています。ほとんどの生徒が大進学を目指す高校ですが、これ

までは推薦入試中心で、入れるところに入れてほしい、という感じの子が多かったです。私は2年前に赴任し、生徒たちにもう一段上の学校も視野に入れさせようとしてかけています。というのも、「どこなら入れそうか」と自分の足元ばかり見る子は頑張ることを適当なところでやめちゃうんですよ。前任校では足元も見ずに「早稲田に行きたい！」と言うような子も結

●参加者（プロフィールは記事の最後にあります）

澁谷浩子

小坂元

松浦貴昌

井口辰也

構いて(笑)。でも、そうして腹をくくった生徒ほど伸びるんですね。いまの学校でもそうした挑戦をさせたいなど。生徒の雰囲気は段々変わりつつあります。ただ、生徒の家庭のほうに「あまり無理をさせなくていい」という空気もあり、このまま突き進んでいいものか少し悩んでいます。

井口：私立の中高一貫校で、中学1年生の担任をしています。専門は漢文で、授業では主に高校生を教えています。その子たちのキャリア教育に対する感想などを目にして感じたのは、いまの子たちには、人のためや、周りのために働きたい子が増えている、ということですね。いい大学を出ていい会社に入ってお金を稼ぎたい、という自分だけの視点ではない。社会の変化を感じ取っているのだと思います。一方で、怒られることやトラブルに弱かったりと、子どもたちの生活力のようなものが低下していないか気になることもあります。このまま社会に出て大丈夫



人のためや、周りのために働きたい子が増えている

井口

かなあ……と。

澁谷：世界中で語学学校を運営するイー・エフ・エデュケーション・ファースト(EF)という、スウェーデン資本の教育機関で働いています。私の主な仕事は、そこへの留学を希望する中高生や大学生、社会人の相談にのることです。中高生は春休みや夏休みを利用して、子どもたちの成長を見られることにやりがいを感じています。

大学卒業後、まず入ったのは投資銀行でした。未知だった金融の世界に興味をもったんです。その後、テレビのニュース番組を制作する仕事に移り、のちに独立して映像関係の仕事をしました。EFに入社したのは、コミュニケーションの仕事に興味があったのと、EFの人たちと一緒に働きたいと思ったからです。

松浦：NPO法人プラストビートの代表として、主に二つの活動を

しています。一つは、中学校や高校などでキャリア教育をさせていたくこと。もう一つは、学校の外において、多様な若者がチームで音楽イベントをつくりあげ、そこで得た利益を好きな団体に寄付して社会とつながる、というプログラムを運営することです。

もともとは僕自身が音楽に打ち込んでいました。高校生のときにバンドを組み、大学には行かず10年間活動し、全国ツアーやCDのリリースを経験して。その間に、アルバイトも土木作業やパチンコ店など30種類以上経験しました。

26歳のときにビジネスの世界に向かう決心をして、ビジネススクールに飛び込みました。そこで見込んでもらえて、スクールのスタッフを経験してから、2006年にマーケティング会社を立ち上げました。ホームページ制作や新規事業の立ち上げなどを手がけています。会社経営とNPO運営の二足のわらじを履いている状態です。

できることだけでなく やりたいことへの挑戦も

編集部…みなさんは、いまの子どもたちにはどんな生き方を伝えたいと思っていますか？

井口…お話を聞いていて思ったのですが、澁谷さんと松浦さん、お二人とも生き生きとされているんですね。そうした姿は生徒たちにも届けたいです。私たち教員が、仕事のことをそこまで楽しんで語れるかどうか。

小坂…私は教員志望の子に「9割5分はつらい仕事だよ」と伝えていきますね（笑）。ただし月に1回くらい、みんなと接する中で、ちょっとしたことだけでもいいものがあったようないいことがあって、だから続いているようなものだ。私もお二人は、本当に生き生きとされていると感じました。

井口…お二人にとって仕事の楽しさって何なのでしょう？

松浦…振り返ってみると、僕はアルバイトのころから「どうやった

「やりたい」と思って 取り組んだものほど 頑張れる

澁谷



ら楽しめるか」を自分で考えていたかもしれない。いくつ売ればいくらの儲けになるのか調べて面白かったり、肉体的につらい仕事なら、どう役割分担をすれば楽に作業できるか考えることに燃えた。どんな仕事でも自分で楽しみを見つけろ。思うのですが、いまの子たちは「できるか、できないか」で、ものごとを考え過ぎじゃないでしょうか。小坂先生のお話のように、進学先も「入れるかどうか」とリスクばかり気にして、自分の気持ちとしてどうしたいかが表に出ない。もう少し「やりたいか、やりたくないか」を軸に考えると、できるかわからないことにも挑戦する意欲が高まって生き方が違ってくるように思います。

澁谷…私も「やりたいか、やりたくないか」を子どもたちに大事にしてほしいです。留学する中高生も、きっかけはたいいてい、海外ドラマに憧れて、とか、海外の有名店で買いたかった、とか些細なことなんです（笑）。これが

大学生になると、就職活動に備えて留学ぐらいしなければ、と追われるように海外に行く子も出てきます。どちらの成長により目を見張るかという、ただ行きたくかつ中高生のほうなんです。先入観がないから幅広く多くのことを吸収する。「やりたい」と思って取り組んだものほど頑張れるし、成長できるのだと思います。

大人は子どもたちに どこまで手を貸すのか

編集部…先生方としては、仕事の楽しさだけを強調しないように、という意識もあるのでしょうか？

小坂…例えば保育士になりたい子がいて、理由を聞くと「子どもといると癒されるから」と返ってきた。そんなときは「癒されながら、お金までもらうの？」「お金をもらうからには、それだけの苦勞もあるはずだよ」と話します。仕事の大変な面もやはり知らせるべきだと思っんです。大事なことは、

本人がそうした部分も「乗り越えたい」と思うかどうかで。

澁谷…私もそう思います。最近
は、人のために何かをしたいとい
う優しさをもった子を多く見かけ
ます。その点は素晴らしいので
が、半面、お金を稼ぐことや現実
と向き合うことから少し逃げてい
るかなと感じることもあって。人
のためにはなりたいたけれど、怒ら
れることや、キツイことがあると、
気持ちがついてこなくなったり。
小坂…ストレス耐性の問題です
ね。

澁谷…子どもたちが留学する
とき、親御さんに必ず伝えるのが
「留学はストレスをお金で買うよ
うなもの」ということ。異なる生
活環境で暮らすストレス、英語だ
と言いたいことがなかなか伝わら
ないストレス、周囲から意見を求
められるストレス。そうしたスト
レスを乗り越えてこそ味わえる楽
しさがあるので、お母さんも耐え
てください。それでもつい過保
護になるのが親心なわけですが。

井口…子どもをどこまで支えるか
は本当に難しいですね。いまは
「親切という名の不親切」が増え
ていると思うんですよ。例えば、
宿題を出し過ぎるとハラスメント
になる恐れがある、という話があ
がっています。提出物を出せなく
て、学校に来られなくなる生徒が
増えているからです。以前なら、
宿題をやつていなくてもひとまず
教室に行こうという子がほとんど
でしたが、最近はそのから逃げて
しまう。家庭もそれを認めて、場
合によっては「ママが先生に言っ
てあげる」と手助けをする。そう
した親切は子どもを逆に苦しめて
いるように思います。

改めて問い直したい 「働く」ことの意味

小坂…親御さんが無職だったり、
働くことにやりがいを見いだせて
いなかったりするケースもありま
すよね。

松浦…僕は、お金の話は気をつけ



「働く」というのは 「誰かを幸せにする」こと

松浦

ないと怖いなど思っています。
「働く」というのは、「傍を楽にす
る」のが語源という説もあって、
要は「誰かを幸せにする」ことだ
と思うんです。喜んでもらえた対
価として、現代はお金をもらえる
ことが多いだけで、働くことの中
心にあるのはお金じゃない。そこ
を語らず、お金が大事とだけ伝え
たり、一生でどれだけのお金が必
要かを計算させたり、正規雇用と
非正規雇用の年収の違いを示した
りして何になるのか。フリーター
やニートになった人が、「十分に
お金を稼げない自分には価値がな
い」と思うかもしれない。そうし
て自分はダメだと思ったら、働く
意欲も失せて、生活保護が増える
ことになると思うんです。

小坂…お金さえあればいいのな
ら、もう生活保護でいいと。

松浦…そうですね。ところが実際
は、お金さえあればいいのかとい
うと、ホームレス支援をしている
NPOの友人から聞くのですが、
生活保護でお金を得たホームレス

の人のその後の行動で考えにくいことが起こっています。それは自殺なんです。お金はもらえた。でも人とつながっていない。社会から必要とされていない。そう感じて命を落としていく。それは本当に苦しいだろうなと思うんですよ。だから、たとえもらえるお金は少なくても、人とつながって「傍を楽にする」中で感謝され、自分を肯定して生きていける社会であってほしいと思っています。

いまの社会の価値観で ものごとを語る危うさ

松浦…そもそも僕がマーケティング会社を運営していて感じるのは、時代の変化の早さなんです。いまの社会と子どもたちが成長したときの社会は、まったく違うはず。なのにいまの価値観にとらわれて、年収はこれだけ必要だとか、こんなスキルを身につけろとか伝えても、ズレが生じてしまう。例えばICTや機械の進化は、人間



小坂

自立とは一人で何でも やることではなく、 みんなと生きること

からさまざまな作業をさらに奪います。世界中のみんなが「働く」ことができる未来とはどんな社会なのか。その意味を一人ひとりがとらえ直し、考え方をシフトさせていく必要性を感じるんです。

澁谷…アメリカの研究者が、いまの小学生が大人になったとき、その65%はまだ存在していない職業に就くだろうと予測して、話題になったことがありますよね。考えてみれば子どもころは、システムエンジニアやコンサルタントといった職業はありませんでした。先が見えないほど速いペースで動いている世の中で、いまの職業や仕事の情報を伝えることに、どこまで意味があるのかな、とは私も考えることがあります。

小坂…学校は、社会人とはこうあるべき、といったゴールをまず設定し、そこに向かってこんなスキルを身につけよう、といった教え方をすることが多いと感じています。でも、お二人の生き方を聞いていると、より実存的なんですよ

ね。どこにたどりつくのかわからないけれども、その中でもがきながらセルフプロデュースをしていく。ゴールを設定してそこを目指すのではなく、根っこさえちゃんとあれば、多少の寄り道をしたつておれずに生きていける。そうした生き方をもっと伝えていく必要があるのかな、と思いました。

他者と関わる中で 生きていけるように

編集部…その「根っこ」とは？

小坂…生きる力とは何だろうと考えていたら、学生時代に東京から北海道まで自転車で旅したことを思い出したんですね。社会的な「自立」を意識して、一人でもどこまでできるか試してみたくて。ところが出発してみると、露店のおばちゃんや応援してジュースをくれたり、同じように旅をしていた人がテントに泊めてくれたりと、行く先々でいろいろな人と関わることになった。「一人では生きられ

ないんだな」と思いました。自立というのとは一人でもやることではなく、みんなと生きることなんだ。他者と関わりながら、その中で自分のポジションを見つけ、生きていく力。それが生きる力の土台ではないでしょうか。

澁谷…その他者との関わりの中で、自分の喜怒哀楽を素直に表現することも大事かと思いました。特にこれからは、世界中の人とコミュニケーションする機会も増えるはず。日本には行間を読むという文化がありますが、そうした国は少なく、思いをはっきり伝えないとコミュニケーションが成立しないこともあります。もっと感情を表に出していいと思うんです。

松浦…海外に行くと、自己主張するのが世界のマジョリテイなんだ、と実感しますよね。でもそれは日本の文化の否定ではなくて、例えば「自分はこういう環境で育ったから、ずけずけ言うのは抵抗がある」とさえ伝えられれば、相手の理解も深まるもの。自分の意

思を素直に伝えることは、第一のステップかな、と僕も思います。

井口…私も生きる力とは何だろうと考えてみたのですが、世間で当たり前のように言われていることをきちんとできることではないか、と思いました。当たり前のこととは「あいさつ」「感謝」「思いやり」です。それを忘れなければ自然に人が集まり、みんなを支え合っているのではないかと。つい先日、新たな飲食店のスタイルを創造してヒットさせた人の著書を読んでいて思ったんです。確かにお店のコンセプトが面白い、でもこの人のもとに大勢の協力者が集まったのは、何よりもこの人の「人柄」だよなあ、と。

松浦…そのとおりだと思います。ビジネスはコンセプトやスキルばかり注目されがちですが、人として大事なところをなおざりにしたら、みんなと何かをつくりあげることなんてできないですよ。小坂…他者と関わる中で自分を表現したり、相手に感謝したり、周

りを思いやったりする。教員としては、学校で生徒のそうした力をどうやって伸ばしていけばいいかを模索したい、と思いました。もっとも、そこを全部学校だけで抱え込んでしまうと、今度は教科の勉強がおろそかになり、それはそれで危険だとも思います。

澁谷…私がEFに入社した理由の一つは、会社のミッションに惹かれたからでもあるんですね。そのミッションとは「壁を壊す」。地理的条件や言語や文化など、立ち上がる壁をことごとく壊していく。いまはまさにそれが求められている時代ではないかと思えます。立場の違いを超えて、みんな子どもたちの生きる力を育む。多様な人で集まって考えればいい知恵が浮かぶかもしれない。そこに中学生や高校生がいても面白いかもしれない。そんなふうには、学校の垣根も世代の壁も越えて、みんなでダイナミックに動いてみる。そうすることで、ものごとが動き出すような気がしています。



小坂 元

こさか げん

（東京都立豊島高等学校教諭）
教職29年目。現在6校目。教科は英語。部活動は軟式テニス部。前任校では交換留学の生徒支援などにも携わる。モットーは「視点を変える」こと。



井口 辰也

いぐち たつや

（私立本郷中学・高等学校教諭）
教職28年目。公立中学校の教員を経て現在の私立校に。教科は国語。部活動はラグビー部。座右の銘は、部活動の指導の際、部員にも伝える「あおいぐま」（焦るな、驕るな、威張るな、ぐれるな、負けるな）。



澁谷 浩子

しぶや ひろこ

（イー・エフ・エデュケーション・ファースト）
投資銀行やTV番組制作などを経て、現在の会社に。子どもたちの留学を支援。物心ついたころからの海外生活が考え方の軸になっている。座右の銘は「流れる汗は嘘をつかない」。



松浦 貴昌

まつうら たかまさ

（NPO法人プラストビート代表理事）
まっくら・たかまさ
バンドのベーシストとして活躍後、2006年に起業してマーケティング会社を設立。2009年にプラストビートを立ち上げる。モットーは「いま、を生きる」。